翼 - TSUBASA -

ルピナス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翼 - TSUBASA -

【Nコード】

N7399K

【作者名】

ルピナス

【あらすじ】

退院した智明は久しぶりに学校へ登校した。周りは回復したことを喜んでくれているが、素直に喜べない。俺はもう走ることができなんだ……。

そんな智明の前に一人の少女が現れる。「守護天使だよ。なんつって、あはは」
誰だお前？

プロローグ

「危ないっつっ!!! 母さんっ!!!」

私の体は、反射的に母を庇うようにして覆いかぶさっていた。

その瞬間は、まるで走馬灯そうまどうのようで。

母がゆっくりと私を振り返り、驚いた顔を見せて。

私は、そんな母の顔を見て、ゆっくりと笑顔を返した。

大丈夫だよ。母さん、守ってあげるから……

声にはならなかったと思う。でも、私の思いは母さんには伝わった気がした。

その後のことは、よく覚えていない。

でも……

母さんが私の名を叫ぶ声と、弟が必死に助けを求める声は、薄れゆく意識の中でも聞き取ることができた。

そして

それが、私の終りであり……始まりだった。

第1話

空は澄んだ青。久しぶりに登校した俺の気持ちを表してるかのような快晴だ。

季節は、クソ暑い夏が終わって、これから涼しく快適な秋がやってくる。

それでもまだ、窓際の俺の席は最後の足掻きとでもいうべき太陽光が容赦なく射し込んでくる。

「おいつ、ともあめさき 智明。もう、怪我は大丈夫なのか？」

昼休みになつた途端に、隣のクラスからやってきた高校生にしては敵つい顔つきのこいつは、俺の親友で幼馴染。

幼稚園から一緒だ。

「ああ、まあな」

「完治したのかよ？ 部活は出来るのか？ それにしても災難だったよなあ……でも生きてるんだから不幸中の幸いか」

人の不幸を笑いの種にするのが学生の定石なのに、律儀に俺のケガの具合を心配するのは、こいつ、かげぬまひろゆき 影沼弘幸のいいところだと、俺も素直に認めている。

「テニスはしばらくムリだな。リハビリにも通わないといけねえし。日常生活には問題ねえとか言われたけど」

「リハビリかあ……」

勝手に俺の前の席に座って、かげぬまひろゆき 影沼は思案顔になつた。

「白上くん」

「あ??」

振り返ると、購買の紙袋を抱えた女子が、少し距離を取る様にとちを見てた。

「あの……井上先生が、その、話があるから職員室まで来るようにって……」

その怯え方は過剰じゃねえか。

「ああ、そ」

俺が返事をしたのを確認すると彼女は、睨んだわけでもねえのに、数人の女子とお互いを庇い合うようにしてそそくさと教室を出て行った。

「おまえさあ。もうちょつと普通にできないの？」

影沼が溜息まじりに言う。

「なんだよ、普通って」

「だからさ、笑うとか。それがダメなら、ありがとうとかさ。怯えてたじゃん」

「はあ？ そんなの向こうが勝手にやってるだけだろっ。っーか、笑うって何だよ」

そんなことできるかっ。俺が何かしたわけでもねえのに。

俺が職員室に行く為に立ち上がると、影沼は「また、放課後に」と言っつて自分の教室に帰っていった。

廊下は、これから昼飯を食べようとする生徒達でざわついていた。職員室は北校舎の2階にある。南校舎の3階にある俺の教室からは少し離れている。

井上は、俺の担任で、神経質なくらい生徒の心配をする教師だ。それを鬱陶しがって反抗する生徒もいるが、それがかえって井上の責任感に火をつけているのは分らないらしい。

その井上が俺を呼び出す理由は、だいたい検討がついた。

夏休みに入った途端、家族で行った旅行先で俺達は事故にあつた。家族は皆軽傷で、俺だけが1週間意識不明の重態だつた。意識が回復して起き上がれるようになると、命を取り留めたのが不思議なくらいだつたと医者に言われた。親父は、ゴキブリ並みの生命力だと言っつて笑つたが、お袋は、何も言わずにずっと泣いたままだつた。いつも生意気な妹でさえ、泣き崩れるしまつだつた。

俺としては、記憶が事故の直後で止まっていて痛みも感じていなかったから、その時は何が起こつたのかさっぱりだつた。いきなり目の前で家族が泣いたり喜んだりしているのを見せられて、正直困

惑したし。

その後、家族と医者から説明をうけて、包帯やらギプスやらで固めてあった俺の体を見て状況を把握したんだ。

まだ、夏休みに入ったばかりだったのに。俺の夏は、意気込んでいたような幸せをゲットできずに、むしろ悲惨な思い出と傷跡を残して終わった。

「白上、こっちだ」

昼休みモードな職員室に入ろうとすると、後ろから井上に声をかけられた。

井上は小脇に教科書らしきものを抱えて俺を手招きしてた。174センチある俺を上から見下ろす井上はひよろりとしていて、見た目からは想像できないが運動神経はいい。

案内されたのは、印刷室。といっても、普通の教室にただコピー機や印刷機を沢山並べただけの部屋だ。

「お前、レポートを書いてこい」

「は？」

井上の話はいつも唐突すぎる。

「夏休みの宿題は免除にしてやる。他の教科の先生達にも許可はとつてあるから、レポートを原稿用紙で最低20枚書け」

「20枚?!」

貴重な夏休みは、一週間前に終わってしまっていた。ずっと入院してたわけじゃないけど、殆んどをベッドの上で過ごしてすげえ退屈だった。

それにしても20枚は多すぎだろ?! それなら普通に夏休みの宿題を終わらせた方が楽だぜ。

「期限は9月中だ。なんでもいいぞ、本の感想文でも事故についての作文でも、会計学についてでも」

「会計学なんてぜってー書かねえ! にやついてんじゃねえよ、井上。」

「それから、部活はしばらく休め。医者の許可が下りたら試合にも

出してやる。それまでは大人しくリハビリに専念しろ、いいな」

井上は、担任であると同時に俺が所属するテニス部の顧問でもある。

「……………わかりました」

「それだけだ。戻っていいぞ」

井上に印刷室を追い出されて俺の足は教室へと向かった。

怪我の心配じゃないのか。てっきり、しつこいくらいに追求されると思ってたのに。ちょっと拍子抜けだ。

別に心配してほしかったわけじゃない。鬱陶しいことを覚悟してたのに、案外あっさりしてたと思っただけだ。

「どうやって書くんだよ、レポートって」

溜息をつきながら、俺はすり変わった宿題の内容にげんなりしていた。

第2話

長つたらしい井上の話が終わって、やっと放課後になった。

俺は、鞆をもって廊下へと出る。部活へ行くヤツも、そうでないヤツもみんな同じように楽しそうな顔をしていた。

「智明！。帰るのかあ？」

靴箱からスニーカーを取り出していると、影沼が小走りに近づいてくる所だった。

「やっぱ、部活にはでないのか？ ちらつと、顔だけでも出さないか？」

テニスに真面目な影沼は、次期部長候補として先輩からも信頼され、後輩からも慕われている。だから、躊躇いもなく否定する俺の言動なんか理解できないだろう。

「いや。病院あるし、帰るよ。それに、ラケット振れねえのにコートに入ってもな……」

「そうか……そうだな。大変そうだけど、リハビリ頑張れよ。じゃあ、俺、部活行くわ。また明日な」

「ああ、また」

決して嫌味でもなく、爽やかに言葉を残して部室へ向かう影沼を見て、俺はホツとしていた。あいつの事だから、熱血教師バリに部活のなんたるかを語るかと思っていたが。

あいつなりに、俺を気遣ってくれているんだろう。

通学に自転車を使っていた俺は、徒歩での道程が思ったりも長い事にうんざりしながらバス停へと向かっていた。

9月に入ったというのに残暑は厳しくて、顎のラインにそって汗が垂れてくるのが気持ち悪い。

松葉杖を使わなくても歩く事はできるようになって、まだ2日。足を曲げると間接に痛みが走る。これ以上悪化させない為に極力足を曲げるなと言われた。

自転車に乗ることもムリなのに、ハードなテニスなんか出来るわけがねえ。

影沼みたいにテニスに一途だったわけじゃないが、いざ大会に出れなかった事実に基づく当たったら、怒りで頭が割れそうだった。

事故も天候による災害で誰のせいでもない。怒りの矛先がなくて俺はしばらく悶々としていた。

でも、考えたって仕方がねえ。過ぎた過去は戻ってこねえんだから。

そう思い込むことで、俺は平静を保っていた。

バス停には、既にバスが来ていて、同じ制服の生徒が数名乗り込もうとしているところだった。

走ることはいらないから、そいつらがもたついてくれる事を願って、俺は気持ち足早になった。どうせ、変わらなかつただろうけど。

帰宅ラッシュにはまだ早いようで、バスは意外と空いていた。座る場所があつて助かった。駅までずっと立ちっぱなしじゃあ、車体が揺れる度に痛みに耐えるのが辛い。

視線のやり場が定まらず、俺は窓の外を眺めた。

バスの速度に合わせて景色が流れる。信号や軽い渋滞の度にバスが止まると、何故か早く動き出さないと気持ちが悪かった。

駅までは20分弱かかる。そこから、また別の路線のバスに乗り換えて25分。自転車だったなら、直線的に道を選んでいけるから25分で家に帰ることができるのに。

もどかしいったらねえ。

大通りに出ると、バスは速度を上げた。それでも、バス停でいち止まるからイラツとする。

後10分。携帯の時計を見て、俺は溜息をついていた。

すると、誰かが「危ない」って言った気がした。顔を上げると、前に座っていた乗客が全員窓にへばりついて、小さな悲鳴を上げたり、危ないを連呼していた。

俺も同じように、窓の外へ視線を移そうとした、その瞬間

ている方がいましたら手を上げてください」

叫んだのは、バスの運転手だった。その声を合図に、乗客がざわつき始めた。

俺は立ち上がろうとして、足に痛みが走り思わずうめき声を上げてしまった。それが災いして、そこから俺は怪我人扱いとなった。

バスを降りると、車体はボコボコにへこんでいて、あろうことが歩道に乗り上げていた。

ありえねえ。なんだこれっ、この状態！ どうすりゃこんなことになるんだよ。

周りは野次馬で騒然としていた。乗客の殆んどは放心状態で無残な姿のバスを眺めていた。

「なんだよ……これ………」

そんな言葉しか出てこなかった。

「結構、力使ったなあ。まあ、いいか。皆、無事みたいだし。あーあ、バスペシャンコだよ。この後の処理は、どうしようかなあ」

さっきの女の声だ！

俺は、反射的に声をした方を振り向いた。

そこには、確かに女らしき人物が立っていて、そいつと俺の視線が重なった。

「あれ？ 見えるの？ あらあ、見えちゃった？ おすっ、智明。守護天使です、なんつって。あはは」

言い終わった女は、信じられねえ事に、空気に溶けるように消えちまった。

第3話

女が消えた。

数日前に俺が体験した説明のつかない現象。

そいつに、俺は頭を悩ませている。イヤ、悩まされてるって言う方が正しいか。

目の前で俺に話しかけていたはずの女が消えたんだ、驚かない方がおかしいだろ。

「守護霊じゃねえの？」

バナラのシエイクをズリズリと睨りながら、影沼が言った。

「靈感もねえのに見えるのか？ 霊が？」

「出来たんじゃない？ よく言うだろ？ 人間、一度あの世を彷徨うと霊が見えるようになるって。お前この間、死にかけたんだろ？」

確かに俺は死にかけた。らしい。

三途の川を見た記憶なんかまつたくねえが、生きてるのが不思議だったと言われたのは本当だ。

「迷惑な話だ。それに、あれ1回きりだぞ？」

「じゃあ、あれだ。ほら。お前があんまり不幸だから、ご先祖様が心配で来てくれたとか。事故にあつて夏休みを棒に振った拳あけく句くに、まだ怪我が完治してないのにバスで事故に合うって、結構な不幸だよな」

「ほつとけよっ」

俺はジンジャーエールを喉に流しこんだ。

人間が消えたなんて話、親でも信じないだろう。絶対に事故の後遺症じゃないかって言われるに決まってる。

「けど、自分で守護霊とかがつて言ったんだろ？ じゃあ、そうなんじゃないの？」

「そりゃ、そうだけど……」

何かがしっくりこなかった。素直に納得できるような話じゃない。

「あ、そうだ！ あれだ、あれ。ええつと、占い師？ とかに見てもらえばいいんじゃない？」

「あ？ 霊媒師とか？」

「ああ、そうそう。それとか。一度試してみれば？ 街とかに行けば通りとかに座ってるじゃん」

バニラシェイクがなくなったらしい影沼は、椅子に背を預けて壁に張ってあるサイドメニューを物色しているみたいだった。

「見てもらうって言うてもなあ……それって女がやることだろ。日曜とか女の列が出来てんじゃない。それに並ぶのかよっ、ぜってー……ヤダ！」

女に混じって列に並ぶことを想像したら、背筋に悪寒が走った。
ムリだろっ。

「そうかあ？ 男も結構いると思うけどなあ。じゃあ、神社でお祓いとか？ あ、守護されてるから祓っちゃいけないのか」
いいけどな。祓ってくれて。

「まあ、いいや。こんな事でいつまでも悩んだって仕方ねえ。それより、そろそろ行くこっぜ。買いに行くんだろ？ ガット」

「ああ、まあ。もう、いいのか？ 結局、解決してない気がするけどなあ」

そう言いながらも、影沼の体は浮き上がって立ち上がる寸前だった。

「いい。自然現象とか錯覚さっかくで説明できねえなら、もう分かんねえ。

それに、話したらなんか、どうでも良くなったっつーか」

「そうか？ なら、良かったな」

もう影沼は立ち上がってやがる。本当は、早くスポーツショップへ行きたくて仕方なかったって事が良く分かる。

「んで、お前はガットを切らしたのは1週間で何回だ？」

「はははは。さあ？」

振り返らずに誤魔化し笑いをする。凶星をつかれた時は、腹の底から笑うのがこいつのクセだ。

ファーストフードの店を出た俺たちは、歩行者天国になったショッピング街の車道を人を避けながら歩く。夕方まではホコ天になるから、その間は人通りが減らない。人とすれ違う度に肩を斜めに動かさねえとぶつかっちまうのが面倒だった。

目指すシヨップは、メインの通りから少し外れた場所にあった。少し人の数は減るが、少ないわけじゃない。

「ちわーっす」

自動ドアが開いた瞬間に影沼が声を張り上げる。当然、中にいた客の殆んどが俺たちを振り返る状況になる。

「おお。来たな小僧ども。青春してるか？」

「あはは、オヤジ臭いっすよ、三浦さん。今日も行って来たんすか？ 波乗り」

「何言つてんだ、俺はまだ24だぞ。波乗りは、最近行ってないなあ。色々忙しくてよ。おう、智。そーいや、智は夏の大会出たんだよな？ 結果はどうだった？」

予想はしてたが、いざ聞かれると答えに詰まっちまう。

「あ、ああ……えっと、俺、怪我しちゃったんすよ。運悪いっつか、はは」

乾いた笑いしか出来なかった。

「そうか……そりゃあ大変だったな。怪我は治ったのか？ まだ来年があるからな。諦めんなよっ少年」

「……はい」

三浦さんは俺の肩をバシッと叩いた。痛みの分だけ慰められてる気がした。

「んで、注文受けてたガット入荷してるぞ」

そう言っただけの奥へ消えたシヨップのオーナーである三浦さんは、サーファーだけどテニスもプロ級に上手らしい。自称だからホントのところは分からねえけど。

店内は半分がサーフィンアイテムで、趣味でテニスもするからなのかテニスアイテムもそこそこのいいものがセレクトして置いてある。

「お？ 新しいラケット出てる。高いよなあ新作………これ結構いいかも。重心が先端にあるよ」

影沼は、勝手に商品のラケットを手にして振り回し始めた。

俺も夏の大会に向けて新しいラケットの調整したり、予備のグリップを用意していたが、無駄に終わった。今は、練習すら出来ない始末だ。

「おい、ガットこれでいいかあ？ 貧乏学生だからなあ、割引きしといてやるよ。5500円な」

「すみません、いつもありがとうございます。えっと、金、金つと」

ガットは個人で買ってラケットに張るのが普通だ。だけど俺ら2年のメンバーは、影沼を筆頭にパワーヒッターが多いせいか、切れる率が高すぎて最悪毎日張り替えたりしてる。だから、全員で金を出し合って業務用を買うのが常だ。

「お前らさあ、ガット切れすぎだぞ。テニスは力じゃないって事分かってるか？ 小僧ども」

もっと言っちゃってくれっ。三浦さん。ガット使用率が高いのは影沼なんだ。

「分かってるんすけどねえ、力入っちゃうんすよお」

「はは、若いねえ」

「だから、オヤジ臭いですって。んじゃ、ありがとうございます。また来ます」

「おう。今度はガットじゃなくてラケット買いに来いよ」

買うもの買ったら影沼はさっさと店を出ようとする。でも、三浦さんは嫌な顔したりはしねえ。大人だよな。

「智明、この後どうする？ 俺、コート予約してあるから少ししか時間ないけど。買い物するなら付き合っよ」

部活がない日もテニスか。

「いや、俺もこの後リハビリあるし、帰るわ」

「そうか、じゃあ、帰るか」

本当はリハビリなんて予定にはない。けど、何となくそういう事
にしておきたくなった。買い物するつもりで財布も持って来たのに。
俺は嘘をついたことに後ろめたさを感じながら、影沼と肩を並べ
て元来た道を戻った。

第4話

何やってんだ俺は。こんなところで。

手にとって見ていたマンガの新刊を陳列棚に戻して、俺は本屋を出た。

外は休日らしい雰囲気に包まれて、濁流のような人ごみが出来ている。どいつもこいつも自分の世界に浸りきって、周りなど気にもしてない。まったくの赤の他人が、こんなにもすぐ近くをすれ違っているってーのに、何の関心も示さねえ。

まあ、示されても鬱陶しいだけだが。

俺は、目的もなくとりあえず足を動かした。

影沼と別れた後、俺は帰るフリをして街中をぶらついていた。財布は持つてきているが、精力的に買い物をする気分にはなれず、だからと言って、素直に帰る気にもなれなかった。

テニスをするだけの能力を發揮しない足は、歩くだけなら支障をきたさないのが、あり難くもあり腹立たしくもあった。

俺は、何となく入ったCDショップで、今まで聞いた事もなかった洋楽のジャケットを眺めながら視聴した。

何を言ってるのかサッパリ理解できねえが、言葉の意味を考えずに済むことが今は楽だ。

家にも学校にいても、「不幸中の幸い」が俺の代名詞になっていた。事故にあつてから病院で目覚めるまで意識不明だった俺には、細かい経緯を説明されても実感が湧いてこねえ。

それなのに、「良かったね」とか、「歩けるだけ感謝しなきゃ」じとか勝手な事ぬかしやがる。

歩けるけど、テニスは出来ねえんだよつ。確かに、俺たち2年には来年もある。

けど、俺は走ることから始めなきゃならねえ。スタートに戻ったところか、マイナスじゃねえか。

夏休みの殆んどをベッドで過ごしたのだ。大会に向けて調整しているはずだったのに。

いや。将来テニス選手になるとかって夢があるわけでもなく、テニスで飯を食っていいこうなんて、思ってもいない。

じゃあ、なんで俺はこんなにもテニスのことばかり考えているんだ。そんなに好きだったか。

大会の選考から外れたって、こんなに悩んだりしたことなかった。部内で俺をライバル視してるヤツに試合に負けたって、悔しいと思っただけもなかった。

俺は、趣味でテニスをしているんだって思ってた。

視聴してたヘッドホンを外して手にしてたCDを持って会計カウンターへ行く。知らないミュージシャンのCDを差し出すと店員が値段を口にした。

「2580円になります」

俺は我に返って、店員の顔を見た。店員も値段を言い間違えたんじゃないかと一瞬視線を外したが、俺は後には戻れなくて財布から金を出す。おつりとCDの入った袋を渡されて、自分の取った行動に戸惑いを覚えながら店を出た。

「ホントに何やってんだ……」

大きな溜息つくくと、それは街の喧騒に吸い込まれた。

俺は、公園というには程遠い小さな広場にあるベンチに腰を下ろした。同じく小さな噴水に流れる水が、太陽の光を反射してまぶしく光る。

その輝きは、今の俺には刃にしか見えなかった。

「……テニス……してえなあ……」

今頃は、砂地のコートを自由に走り回っているだろう影沼の姿を脳裏に浮かべた。

「じゃあ、やれば？」

それは、あの時と同じ女の声だった。

「は？」

聞こえた！ 確かに聞こえたぞつ。俺は急いで振り返った。また、すぐに消えちまうと思っただからだ。

でも、姿は見えなかった。

「ああ、ごめん、ごめん。ちょっと待って。えっと……これで、見えるのかな？」

「なんだよ?! 何処にいんだ? どつから声をかけてやる？」

きよろきよろと首を左右に振って俺は、周囲から見たら不自然だったかもしれない。

女の声は俺のすぐ近くから聞こえてきた。最初はスピーカーを通したようなこもった声だったのが、少しずつ明瞭になっていく。

「見える? どう? 智明? まだかな? 集中力足りないかな?」

随分と曖昧なことを言う。その内に、俺の隣に人間の姿がうっすらと浮かび上がった。

「おまつ……誰だ? つーか透けてる」

人間が突然現れたつてのに、俺も我ながら冷静だったと思う。

「え?! 透けてる?! マジで?! まあ、慣れないことしてるし。その内濃くなるよ。たぶん。あはははは」

笑ってやがる……。なんだこいつ。霊にしては口調が現代風だし、明るすぎねえか。

「……お前、守護霊なのか……?」

さつき影沼が、そうかもしれないと言っていた。

「ああ。守護霊かあ。んー……そんな感じ? 一応、智明のことを見るから当たらずも遠からじつてとこかな。あたしにもよくわかんないけどね」

そう言つて、女はただ1点を覗いては普通の人間にしか見えない笑顔を浮かべた。姿を通して景色が透ける事もなくなっている。

女は耳が出るほど短い髪に、ロツクなロゴがプリントされた白いTシャツを着て、ジーンズと黒い編み上げブーツ。そして、シルバ―の小さなピアスとこっつい指輪をしていた。

どう見ても、守護霊とかじゃねえ気がした。

「ただ、人間じゃない事は分かった。」

「なぜなら、女の背中には、でっかい翼が生えてたからだ。」

「ん？ 智明？ ああこれ？ カッコいいだろ？ ちゃんと飛べるんだよ。ほら？ 自分の意思で動くしね。まあ、全部真っ白じゃないのがアレだけど。あ、これも皆に見えてんのかな？ ってか、あたしの姿って智明以外にも見えるのか？」

「マンガのファンタジーに出てくる天使のような翼を、女は器用に広げたり畳んだりして俺に見せ付けた。」

「さあ？ 知らねえよ。ってかお前何しに現れたんだ？ 何で今更守護霊とかって言ってるんだよ。」

「どうせなら、ケガをしないで済むように事故を防いで欲しかった。八つ当たりめいた感情が俺の中にふつふつと湧き上がってきていた。智明、怒ってるの？ そりゃ、突然現れて混乱させたりして悪いとは思ってるけど、でもバスの事故ん時にもう見えてたみたいだったし。なんか、話し相手が欲しいかなあって思ってさ、姿現す方法を教えて貰ったんだけど。」

「うるせーよつ。余計なお世話だ！ 話す事なんかねえ。」

「え、そんなに怒らなくなっただけいいじゃん。さっきテニスしたいって言ってたよね。リハビリ頑張ったら、また走れるようになるよ。」

「ふざけんやつ、お前！ 勝手な事言ってるじゃねえよつ。テニスはそんな甘いもんじゃねーんだよ！！ 守護霊だかなんだか知らねえが、知った風な口きくなっ。」

「俺は感情のままにまくし立てた。」

「女は、言い終わった俺を黙って見つめて、嫌そうな顔も馬鹿にした顔もしなかった。」

「……そうだね。ごめん。あたしはテニスした事なかった。うん、智明の言う通りだ。」

「そう言つと、女はまた景色に溶ける様に消えた。」

「残された俺は、自分の器の小ささに嫌気がさしてベンチに拳をぶつけていた。」

第5話

「白上！ 体育祭の種目のことだけどさ……」

帰宅しようと思つて教室を出たところで、クラスの友達に声をかけられた。

事故にあつてから約2ヶ月。暦は10月に入って季節は秋だけど、俺は相変わらずリハビリを続けていた。

「は？ 俺、どうせ走れねえよ」

「ああ、うん。それは分かつてるんだけど、それじゃあ、つまらないだろ。だから、走らなくていい種目に参加するのはどうかと思つてさ。せつかくだからメインで。応援団長とかどうよ？」

「……応援？ 団長？！」

驚いた俺を、たなはし棚橋は爽やかな笑顔で対応する。

実行委員長をする責任感の強い優等生のたなはし棚橋は、担任の井上からの信頼も厚い。その上、押し付けがましいところがなくて女子からの人気も高いらしい。

どうせ、お節介な井上に頼まれたんだろう。

「体育祭は生徒全員参加だし、お前だけ不参加っていうのもな。怪我だからムリさせるつもりはないけど、応援なら出来るだろ？ やつてみないか？」

全員参加というのは、学校側が決めた強制事項だ。皆で楽しく、なんでもっともらしいことをいつてるが、要するにサボる事は許さないってだけだ。

「井上の差し金か？ 悪りいけど、俺は、そういうのはパスだ。応援はどうせ全員でやるんだろ？ わざわざ団長やる必要なんかねえじゃねえか。話はそれだけか？ なら、俺は帰るぜ、じゃあな」

「あ、おいつ。白上！ 一応、考えといてくれよっ！」

棚橋は、後ろから念を押すように言ってきたが、そんなこと考えるまでもなくNGだ。話を聞くだけ面倒だった。

今月末には一部の連中が妙に張り切ってる体育祭がある。足が完治していない俺に参加種目はない。体育の時間さえ見学しているんだ、当然といえば当然だろう。

そのことが、担任の井上には気になるらしく、何でもいいから参加しろとしつこい。

いいかげん、放っておいてくれと俺は思う。忙しい合間を縫って、わざわざ俺のこと考えてくれなくても結構だ。

リハビリもないのに、俺は早足で靴箱を後にした。

校門の所までくると、ラケットがボールを打ち込む小気味いい音が響いてきた。それは、随分と遠ざかっていた音だ。

自然と足が動いた。

学校の隣に設置されたテニスコート。近づくと、フェンスを通して長方形の砂地の領域が、まだ踏み荒らされる前の状態で広がっていた。

ボールの跳ねる音は、奥の方からリズムよく響いてくる。多分、誰かが一人で練習しているのだろう。

まだ、学校が終わったばかりで部活が始まるには早い時間だ。ストロークをする相手がいねえんだろうな。

俺は、誰もいない方のコートに近づき、見えないように木の陰に身を寄せてコートを眺めた。

もう2ヶ月以上もコートには立っていない。走れなくなってから、ラケットも握ってはいなかった。

夏に出れるはずだった大会も欠場して、リハビリだと言ってはコートから逃げるように遠ざかった。

井上が俺を気にするのは、部活にも参加していないからだだろう。直ぐに復帰できると思っていたのに、テニスどころかまともに走ることも許されていない。

俺の足は、本当に元に戻るのか？

命は奇跡的に助かったかもしれないが、その後遺症で一生走ることができねえ……そういう事なんじゃねえのか？

俺は、このままテニスを出来ないまま高校生活を終えるのか……。
ゾツとした。

テニス意外の部活動なんて想像できねえし。

じゃあ、帰宅部のままってことか？

毎日ボーっと帰るだけの生活。

「俺は、何の為に生き延びたんだよ」

なあ？ 守護霊さんよ……。

あれ以来現れない守護霊の女。街中でつい興奮して八つ当たりした俺に、愛想をつかして守護霊をやめたのかもしんねえ。それとも、テニスが出来なくて悶々としている俺の幻覚だったのか……。

今更、どっちだって違いはない。非現実的なものに縊^{すが}ろうとするなんて、俺はこんなにも弱かったのか……。

「智明っ？ そんなところで何してんだ？」

ビクツとして振り返ると、ラケットを持ったジャージ姿の影沼がいた。ボーっとしてた俺は、影沼が直ぐ傍まで来てることに気付かなかっただけらしい。

「……別に」

「見に来たのか？」

ラケットをさすりながら近寄る影沼は、いつもより話しずらそうだった。

「ああ、まあ……そんなとこだ。お前は……サーブ？ してたのか？」

影沼の額に汗がとめどなく溢れているのを見て、さっきから響いていたボールの音は影沼だったと気が付いた。

「まあね。誰もいないし、やる事ないから苦手なサーブ練習をちょっとな」

「そうか……」

二人で顔を見合わせて苦笑した。

影沼と言葉を交わすのは何日振りだろう？

特に話題もなく、俺たちは沈黙したまま突っ立っていた。

先に口を開いたのは影沼だった。

「……ボレーでもしていかないか？」

思い切って言ってみたというのが分かるように、俺の返事を待つ影沼はどこかそわそわしている。

ボレー練習なら走る必要はない。

「ただ……」。

「いや、遠慮しとく。アップもなしに体動かすのはちょっとな。それに、ラケット持ってきてねえんだ」

言い訳だった。

「そっか、それじゃあ仕方ないな。また今度にすっか」

「悪いな」

影沼は明るく、いいよと笑った。

俺は、影沼に気を使わせたままその場を後にした。どこか後ろめたくて、気持ちが悪くないまま俺は帰宅した。

「お兄ちゃん、おかえりーっ。頼まれてた本、部屋に持ってったよー。綺麗に使ってよねっ」

やたらと明るい3つ年下の妹は、友達と遊びに行くのだと言って俺の脇を駆け抜けた。俺が部活をやってる時は分からなかったが、妹の部活は1日おきらしい。

2階への階段を登り、西側にある俺の部屋へと向かう。夕方は、西日が差し込んで部屋が朱色になるが、それ以外の明かりは一切差し込まない薄暗い部屋だ。ドアを開けて正面にある机に鞆を置いた。気だるい体をベッドに沈めようと視線を移した時、俺はその先にあるものをみて固まった。

「あ。おかえり、智明」

「なっ！！」

綺麗に翼を折りたたみ行儀良く俺のベッドに座る守護霊の女。

何してんだ人の部屋で！？ っていうかどっから入った？！

「っーか、勝手にクッション抱えるなっ！」

「えっとね、こないだはごめん。悪かった。分かったよっな事言っ

て。で、色々考えてみて、あたしも智明の気持ちをもっと理解してみよう。だから、えっと……あーもう！　ってか、スライズサーブ教えてくんない？」

そう言って笑った守護霊は、どっから持ってきたのか access とロゴの入った水色のラケットを俺に見せつけた。

第6話

スライスサーブ教えてくれない？ 守護霊女はそう言った。

「スラ……イス、サーブ……？ なに言ってたんだ？ つーか、お前、どっから入りやがった!？」

俺は混乱してた。勝手に部屋に入り込んでいる女。

ありえねえ。

「んと、窓？ っていつてもすり抜けたから開けてないけど。便利だけど、ちよつと変な気分なんだよな……」

意味が分からない。

相変わらず、女はケラケラと軽く笑う。

女が、現れなくなってから2週間が経っていた。てっきり俺の守護霊をやめたか、それとも気弱な俺の幻覚なんだとばかり思ってた。守護霊なんて都合のいいものが、存在するわけねえんだし。

なのに……何でこいつは、ここにいる？ 本当になんなんだ?!

「……何してたんだ？ 人の部屋で」

俺は、やつとのことで質問した。

「ああ、うん。だからさ……こないだの事、智明に謝ろうと思って。だけど……謝るだけじゃダメだと思ったんだ。だから、あたしもテニスしてみたんだけど……」

女は俯きかげんで話す。時々、背中が小さく揺れていた。

手にした水色のラケットを見ると、メジャーなメーカーもので水色をベースに黒が配色されたレディースモデルだった。

「……テニスしたのか……?」

驚いた俺を見て、女は苦笑した。

「うん。でも、全然ダメだった。ラケットには当たるようになったけど、コントロール難しいし、ボレーとかすぐネットになるし、サーブは遅いし。テニスって難しいんだなあ」

両手で抱えたラケットのフレームに顎をのせて、小さく溜息をつ

く。

もしかして、あれから、ずっと練習してたのか。わざわざ？俺に謝る為だけに。

あの時、八つ当たりしたのは俺の方だった。なのに、先に謝罪された……。

俺は、女の横顔を見ていた。大きくはないが黒いハッキリとした瞳に、長い睫毛まつげが被かぶさっている。すーっと通った鼻筋と細く綺麗な曲線を描く顎のライン。窓から差し込む西日が顔に影を落とすせいで、なんだか悲しげに見えた。

すると、女が顔を上げて、俺は女の瞳を正面からまともに見る破目になった。

心臓がドクリと跳ねた。一瞬、息が止まったかと錯覚した。

「智明？」

「っ……………テニスに限らず…………簡単なスポーツなんかねえよ」

何言ってるんだ俺？

言いながら視線を逸らした。

違う。そうじゃねえ。悪かったって言えよ。

「そりゃそうだ。あたし、球技苦手だからなあ。水泳なら得意なんだけどさ」

俺には、女の言葉は届いちゃいなかった。

ただ謝るだけじゃねえか。簡単だ。悪かったって言うだけだ。わりいでもいい。

けど、女を見ると何故か言葉が喉で詰まった。

「…………スライスサーブを打ちてえのか？」

「打ってみたいっ！ だって、跳ねないから打ちにくいんだろ？ 相手がつ」

女は無邪気に言った。

「…………テニスの事を自分で調べたのか？ ラケットまで買って？ 守護霊が何でそこまでするんだよ？」

俺が質問した途端、女の顔から笑顔が消えた。

「まあ、守護霊ってのは本当は違うし。幽霊と天使の間ってところかな。本来はこうやって人前に出ちゃイケないらしいんだけど……やつぱ、迷惑だったかなあ？ 良く言われたんだよな……親切でも、必ずしもその人が喜ぶとは限らないって」

「……俺の怪我を治すつもりだったとでも、言いたいのか？」
女は答えなかった。

「……テニスはね、図書館とかで本を閲覧させてもらったんだ。あ、夜中にこっそり見たのは悪いと思ってるから謝るけど、本屋で売り物触るよりいいよな？ ラケットは、訳を話したら仲間が作ってくれたんだ。すげえっしょ?!」

「仲間？ 仲間がいるのか？ お前と同じ守護霊が？」

「うん、まあね。でも、守護霊じゃないって。天使だよ。もっと翼が大きくて、何でもできるんだ。それに比べたら、あたしは何にも出来ない。天使になったばっかりってのもあるんだけど。でも……上から見てるだけってのは……」

「だんだんと声が小さくなって、そのうち、女はしゃべらなくなっ
た。」

俯いてはいないがどこか遠くをみるような視線は、女が今にも泣くんじゃねえかって、俺は慌てた。

「……わりい……」

「言えた。今度はすんなりと、言葉が口から出てきた。」

「謝ってる内容は違うが……」。

「違うっ、智明のせいじゃないっ。ごめんっ！ あたしが自分で沈んじやってどうすんだよっ、あはは。そんなことより、テニスしよ
う。な？ 智明」

明るく振舞い始めた女は、俺を期待するような目で見ていた。

「けど、俺は……」。

「できねえよ。俺は、走れねえんだ」

「……うん。知ってるよ」

「じゃあ」

「でも、テニスしたいんでしょ？」

俺の言葉を奪い取った女は、強い視線を外そうとはしなかった。「走らなくても、テニスすることはできるよ。コートに立つ事だけがテニスじゃないだろっ。生意気な事言ってるかもしれないけど、テニスしたいのに、その気持ちを隠そうとしてる方がおかしいよっ。テニスしたいって言えばよっ！ 智明！」

何も言えなかった。こいつの言ってることはいちいちムカツク。でも、間違っちゃいねえんだ。

俺は、テニスがしたかった。

「……グリップは？ セミウエスタンか？ それとも」

「は？ セミ？ ウエ……？ 何て？」

「だからっ、グリップはどうやって……って、お前まさか……おいっ！ ラケット握ってみろっ！ いいから言われた通りにしろっ、早く！」

「わ、分かったよっ………はい、これでいい？」

案の定、女は水色のラケットを両手でギュツと握っていた。

「何だっその握り方はっ？！ それじゃ野球じゃねえかっ！ そうじゃねえっ。本当に本で調べたのかよっ？」

「んと……サーブの打ち方とか？ ボレーとか？ 線の中に入れればいいんだとか？」

読んでねえな、こいつ。普通のテニス解説ならグリップの説明は書いてある筈だ。

「スライスサーブはまだ早い。とりあえず、グリップを固めるぞ」

ブーブーと文句を言う女をよそに、俺はテニスのDVDと専門雑誌を取り出してベッドに広げた。

すると、女は俺の顔を見て言った。

「あたし、ルカっていうんだ。ヨロシク、智明」

満面の笑みだった。

第7話

俺の守護霊だと思っていた、翼の生えた女　実際には少し違うらしいのだが　は、学校から帰宅して部屋のドアを開けると、ヘッドホンを耳に当てて真剣な顔つきでDVDを見ていた。

女……もといルカは、連日俺の部屋に入り浸っていた。俺が学校から帰宅すると勝手に部屋に居座っていて、夜になるとどこかへ帰っていく。何処から来て、何処へ帰るのかは知らねえが、テニスを覚える為にルカが通ってきている事だけは確かだ。

出入口は部屋の窓。なんか悪い事をしているような妙な気分だった。

それにしても、何故こんな事になったのか。きつかけは、俺に謝罪する為だと言って、ルカがラケットを持参してきたことだったが、グリップがあまりにも大雑把だったから、思わず俺のテニス魂に火がついちまったのが初めだった。その場でDVDや雑誌を見せたり、実際に素振りさせたりして教えたが、一日で上手くなる筈もなく、最後には初心者用のテキストを渡して帰したはずだった。

それなのに次の日の朝、俺が起きるとルカは、ジャージ姿でテレビの前に座っていた。驚いた俺が、「朝っぱらから人の部屋に忍び込むなっ」と怒鳴ると、次の日には、俺が学校に行っている間に侵入した。

おかげで、9時頃に仕事へ出かけていく母から「誰もいない部屋でテレビの音がする」と説教を受けたり、先に帰宅した妹に「お兄ちゃんの部屋で変な物音がする」と気味悪がられたりした。

何してんだっお前はっ！と怒鳴ってはみたが、平然とした顔でテニスの練習と言われた日には、怒る気力も萎なえた。

俺は、テニスのDVDを見てるルカに気付かれないように、そっとなんか机に置いた。

「あ、智明。おかえりーー」

音は立てなかつたつもりなのに、ルカは振り向いた。

「ああ、ただいま。見てていいぞ。俺は、これからリハビリに行く
てくるからな。変な物音立てるなよ」

外したヘッドホンを首にかけたルカは、胡坐をかいてベッドに座
っている。

「分かつてるよ。ねえ、新しい雑誌ない？ ベストコートだっけ？」

「ああ、今月号か？ さっき買ってきたけど、ド素人のお前にはま
だ早いだろうが。どうせ読んでもわかんねえだろ？」

それに、気に入っている雑誌だから、一番に読みたい。

「えー……。いーじゃん。読みたいよー、見せるよーケチー」

「ケ、ケチじゃねえっ」

胡坐をかいたまま体ごとこっちを向いたルカを見て、俺はドキッ
とした。ジッパの少し下りたジャージの間から白いＴシャツが覗
いている。

テニス漬けの毎日を送っているだろうルカの服装は、ロックテイ
ストなジーンズスタイルから、体にフィットした動きやすいスポー
ツスタイルにすっかり変わっていて、出会った頃とは雰囲気全然
違っていた。

「見せる見せるー」

「静にしろっ、騒ぐなっ……分かったよ」

仕方なく俺は、コンビニの袋から雑誌だけを取り出してベッドの
隅に置いた。すると、ルカが嬉しそうに雑誌に飛びついた。

こうしてみると、背中に翼がある以外は普通の人間にしか見えね
え。

「ありがとー。えへへ、このプレイヤー特集がいいんだよな。イケ
メンがいっぱいでさ、目の保養だぜい」

そっちかよっ！ テニスの事を勉強するんじゃねえのか、まった
く。

「じゃあ、リハビリ行って来るからな。それ読んで静かにしてるよ、
いいなっ」

「はい」

雑誌から目を離す事無く、ルカはひらひらと手を振った。

動きやすい私服に着替えた俺は、空返事をしたルカに不安を抱きつつも病院へと向かった。

散々言い聞かせてあるから余計なこととは思わないと思うが、既に妹が帰宅している事ともうすぐ母さんが仕事から帰ってくる事を考えると、素直に安心する気にはなれねえ。まあ、他の人には姿が見えないらしいから問題はないと思うが。

病院は、家から歩いて15分程の場所にあつた。学校帰りにそのまま立ち寄つてもいいのだが、リハビリがある日は、制服に皺を付けたくないので私服に着替えてから行くようにしている。

病院の中は平日にも関わらず混雑していた。受付を済ませた俺は、そのままリハビリルームへと向かう。面倒な診察をしなくていいのが楽だ。

俺が通院する形成外科は、診察室の奥にリハビリルームがある。待合室をそのまま突っ切つて、一番奥の扉へ向かうと、俺のリハビリの担当をしてくれている秋山先生がこっちを見て立っていた。

「智明くん、こんにちは。今日も電気からやるうか。じゃあ、先に入つてて、僕は準備してくるから」

「はい」

早口で言うと先生はスタッフルームへと入つていった。声もさることながら、物腰がものすごく柔らかい秋山先生は、短髪で背の高い20代後半の好青年といった感じだ。男の俺から見てもそこそこイケメンだと思うが、うらやましいとは思わない。俺は俺だ。

戻ってきた先生は、ボーっと突っ立っていた俺に優しく笑いかけリハビリを始めた。沢山の管のようなものを俺の足に貼り付ける。

「もう慣れたよね。電気が通っている間は他の物に触れないでね、通電するから。コレ終わったらウォーキングしよう。どう？ 電気は強すぎない？」

「ああ、大丈夫」

秋山先生は、仏頂面な俺に対しても、いつでも笑顔を崩さない。こういう人達は、笑う訓練とかしてるんだろうか。俺には到底真似できない芸当だ。

ふと、ルカに言われた事を思い出した。

「『智明はもつと笑えよ。笑うだけで自分も周りも幸せになれるんだぞ。笑顔は、最強にして最高のラッキーチャームなんだぞ？ 知ってたか？』」

そう言っつて、ルカは遠くを見るような目でくすくすと笑っていた。何がそんなに可笑しいのかと思いつながら、俺は、そんな簡単に笑えるかっつと突っぱねた。

そういえば、ルカも良く笑う女だ。ノリが軽いとも言っつが。とても天使などという宗教じみた存在には思えない。

だからかもしれない、俺はどこかでルカは人間なんじゃねえかっつて思っつている。

確かに、バス事故の時を含めて2回、あいつは俺の前から突然消えたり、現れたりしているが、それも何かのトリックを使ったもので、誰かをつるんで俺に絡んでいただけなんじゃねえかっつて思っつたりしている。事実、あいつは翼があると言いつながら、俺の前で飛んだ事は一度もない。

でも

何のために？

そんな事する理由が何処にある？ さっぱり検討もつかない。俺にだっつて、ルカにだっつてメリットがあるとは思えない。じゃあ、あいつは……ルカの目的はいつたいい何なんだ？

筋肉を解すほく為の電気治療が終り、セットしたタイマーが鳴ると、秋山先生が機材を片付けに近づいてきた。丁寧かつ優しい手付きで俺をウォーキングコーナーへと促す。

「じゃあ、とりあえず普通に歩いてみて。あ、膝は痛みがない程度に曲げてね。姿勢は気にしなくていいよ」

じつくりと俺の足を値踏みするような視線を受けながら、ぎこち

ない空気の中リハビリは進行していった。

その間俺は、ずっとルカの目的について思索していた。

第8話

リハビリを終えて帰宅すると、ルカの姿はなかった。

強引に俺から奪い取ったテニス雑誌は机の上に置かれ、観ていたはずのDVDは元の場所に戻されていた。

「帰ったのか……」

何だ、珍しく帰りが早えじゃねえか。

いつもは帰れと言っても就寝時間ギリギリまで部屋を占領しているくせに。

コートをクローゼットに閉まった俺は、ベッドに体を投げ出した。部活程の運動量はなかったのに、じんわりと汗をかいている。息があがっていないが、火照った体を休めたかった。

「俺の体もなまったもんだな……ふっ」

勝手に笑いが漏れる。

今日のリハビリは調子が良かった。

足の痛みがなくなったわけじゃないが、以前より間接の動きに壁がなくなった気がする。思い込みとかじゃなくて、先生のお墨付きだから、真実回復しているってことだ。意外と、年明けくらいには走れるようになっていられるかもしれない……。

俺の口元は緊張感がなくなっていた。

もう、走れるようにはならないかもしれないと、そう思っていた。誰もが気を使って口にしないだけで、俺はもうテニスができねえんだって思ってたのに。

全くの成果を見せなかったリハビリも、ちゃんと効果があったって事なのか。

「守護霊か……まさか、本当にあいつのおかげでもねえだろ……」
腕を枕元へと伸ばすと、ドサツと何かがベッドから落ちた。

「あ？」

ベットサイドを覗き見ると、落ちたのは妹から借りていた本だっ

た。表紙には「エンジェルの空」と書かれている。

ひよいと拾い上げて、パラパラとめくった。守護霊とか天使とかいう類たぐいのことがよく分からなくて借りた本だ。ルカが現れなかったら、俺には一生無縁なジャンルだっただろう。

フルカラーのマンガチックなイラストで天使が描かれていて、そのどれもが恐ろしく肢体の整い、美しい顔の人間に真っ白い翼をつけたフォルムだった。複数の翼を持つ天使もいるらしい。

「神の御使いか……」

ルカがもし、神の使いだとしたら……その目的は……？

なんだよ俺。

足が治り始めたら、都合よくルカを天使扱いかつ。

俺は本を閉じた。

本に描かれている天使ほどルカは美麗じゃない。言葉遣いも荒っぽいし、態度だって図々しいことこの上ない。神々しい光だって纏ってねえし。

でも、翼は持っている。

真っ白くて白鳥の様な綺麗な左翼に、艶のある漆黒と白とのモノトーンの右翼。

あれが作り物だとしたら、そいつはきつとどこかの有名な劇団や映画スタッフの一員に違いないと思わせる程の出来栄え。そう、素人の俺は感じた。

もしかしたら、ルカは、人間じゃなくて本物の天使……なのか？

チクリ

あ………れ？　なんだ？　胸が………痛い？

妙に胸がざわついた。

けど、ちょうどその時ドアがノックされて、すぐにその事を忘れた。

「お兄ちゃん、ご飯だって〜。お兄ちゃん？　聞こえてる〜？」

酷く面倒臭そうに言う妹に向かって、扉越しに返事を返す。

「ああ、後で行く………おい、ちょっと待て美郷ミサト」

「はい？ なぁーに〜？」

ベッドから急いで飛び起きた俺は、廊下にいた妹に借りていた本を突き出した。

「……返す。助かった」

俺にはもう必要なかった。ルカが天使かどうかなんて、どうでもいい事だ。俺は、俺の信じたようにするだけだ。

「ああ、天使の本ね。お兄ちゃんがこんなのに興味を持つなんて珍しいよね？ 何か調べてんの？ なんなら他にもあるから貸してあげよつか？ あっ、そうだ！ それより、お兄ちゃん？ ハイ」

「あ？」

本を受け取った美郷みさとは、手の平を俺の前に差し出していた。

何のことだか分からない。

「……だーから〜、いつも言ってるでしょう？ 何事もギブアンドテイクなの。いくら優しい妹だからってタダで借りようなんて思っ
てないよねえ？ えっと、マイジの冬季限定チョコで手を打ってあげるよ」

「は？ 何言ってるんだ、本貸したくらいで。そんなもん自分で買え
っ」

直ぐにでもチョコレートが出てくると思っていただけ、美郷は頬をブク〜と膨らませた。

「なによー！ お兄ちゃんのケチーっ！ 悪魔っ！ ぜんっぜん優しくないんだから。天使に興味あるなら、少しは四大天使ミカエル様の慈悲深さを見習えっ〜のお〜」

「ミカエル様？ 何だそりゃ？ 四大天使？ っつーかケチじゃねえっ」

美郷みさとは不満そうな顔で俺を睨んでいた。

「お兄ちゃん、本当に本読んだの？ 大天使って言ったら一番偉い天使なんだよ？ ガブリエル様とかさ」

何でそんなに自慢げに話す？

「……天使が偉い？ 階級があるって事か？」

「そうだよ。偉くなると翼の数とかも増えるし、セラフィムとか翼が6枚あるんだよ」

ふいにルカの姿が脳裏を過ぎった。あいつの翼は2枚だ。

「……それは、見た目で分かるもんなのか？」

「ん？ 階級？ ん……絶対つてわけでもないんだけどお。何で？」

ルカは、どのくらいの位置付けなんだろうか？

「いや……翼が2枚とかは普通なのか？ 見た目は、人間みたいだしなあ……翼の一部が黒いとか、特別なのか？」

「はあ？」

美郷は素っ頓狂な声を上げたまま、変わり者を見る目で俺を見ていた。

なんだ？ 何かまずい事でも言ったのか？

「何言つてんの？ お兄ちゃん？ 天使の翼は白に決まってるじゃんつ。羽が黒かったら、それ悪魔じゃんつ」

「……………えっ？」

今、何て？ アクマって言ったのか？ 俺の空耳か？ 聞き間違いなのか？

「お兄ちゃん？ おーい？ 聞こえたあ？ 黒い翼は悪魔だよお、

ア、ク、マ。まあ、ちゃんと読んだの？ ほら、まだ貸してあげるから」

「あ？ あ……ああ……」

本を押付けられた俺の頭の中を、美郷みさとの言葉がグルグルと回っていた。

アクマって、悪魔だよな……？ それって、天使と正反対じゃなかったか……？

「つてことで、お兄ちゃん。やっぱり、マイジのチョコと交換って事で、ヨロシクー。じゃあ、ご飯食べてこよーっと。お兄ちゃんも早く降りてきなよね」

美郷みさとは階段を下りていった。

頭がぐわんぐわんと揺れていた。

返事をした事も自覚していなかったらしい俺は、そのまま部屋へと引き下がり、気が付いたときには夕食も食べずに寝てしまっていた。

ルカが悪魔って………どういう意味だ。

第9話

退院してから1カ月半が経っていた。

外は秋風が吹いて、近くの公園の木が疎まばらに紅葉し始めた。テニスをするには、風さえ吹かなければちょうどいい季節だ。

「お前、応援団長するんだって？」

「なっ!?! 何言ってるんだ？」

「あはは、そんな驚いた顔するなよ。棚橋に聞いたんだ。あいつ、お前のこと心配してたよ」

ネットの高さを調節しながら、影沼が笑った。

「あいつっ! やるなんて言ってるねえのにつ。これだからお節介はっ。」

「断つたに決まってるんだろ。やらねえよ、そんな面どくせえもん」カゴに詰め込まれたテニスボールを選別しながら、俺は吐き捨てた。

使い込まれたテニスボールは、表面が毛羽立ち、中のガスも抜けて弾力性が弱くなる。そうなったら、練習用にはなっても試合用には使えない。俺は、使えそうなボールだけを選び分けていた。

「そうかあ? まあ、大声出すとか、手のフリとかちよつとハズイけどな。でも、お前のキャラ的に面白いと思うけど? 隠れファンが増えるかもよ?」

「増えるかっつっ!」

「あはははは」

「ってか、そんなもんいらねーし。それこそ面どくせえ。」

影沼は笑いながら、隣のコートへ移った。

「どいつも、こいつも……お節介なんだよ……」

棚橋も影沼も、俺の心配をしてくれる俺には出来すぎた友達だ。そして、ルカも……。

お節介な女……天使?

悪魔かもしれない……ほんの少し黒い羽の天使。

ずっとルカの姿を見ていない。こんなことは以前にもあったが、今回ののはちょっと違うかもしれないと思っている。

ルカはもう、二度と俺の前に現れない気がしていた。

なぜなら、俺がルカの事を悪魔かもしれない、と疑いを持ち始めたからだ。だから、ルカは現れない。

「おい。そのコート終わったら、向こう側もネット上げてくれ。智明い、ボールの選別できたかあ？」

コートのをぐりと囲んだ柵の向こう側から、テニスウェアにブルズンを羽織った三浦さんが叫んでいた。今日の三浦さんは、テニスの試合の運営者。といっても、公式じゃあなくて仲間内で主催する交流試合だ。

影沼が三浦さんに手伝いを頼まれて、それに俺は巻き込まれただけだった。

「……半分くらい終わりました」

コートに入ってきた三浦さんを見上げて言う。

「そっか、サンキュ。じゃあ、こっちはもらってくから、今やってる分はココに置いといてくれ」

運営スタッフとして忙しいらしい三浦さんは、早口で話すとカゴを引っ掴んで駆け出した。

サーファーでシヨップも経営してて、その上テニスも出来る活動的なアスリート。いるんだよなあ、何でも出来る人ってさ。

「智明、終わった？ なんだ、まだやってんのかよ。手伝うからさっさと終わらせようぜ」

ネットの調節を終えて戻ってきていた影沼は、俺の数倍の速さでボールを選別し始めた。

「あ、おい。それ、ちょっと古くね？ ちゃんと見てからカゴに入れるよ」

「大丈夫だよ。ダメなら途中で変えるよ、きつと」

「おまえなあ……」

テニスの事となると熱血なくせに、時々妙に大雑把だったりする。まあ、そのおかげであつという間に作業は終わった。空になったカゴだけを持って、俺たちは三浦さんがいるはずの運営本部へと向かった。

仲間内で軽いテニスの交流試合、と言っていた割にはコートを8面も借りていて、三浦さんという人の行動力と人脈には驚かされる。普段はスポーツショップのただのオヤジなのに。

「なあ、どうするかあ？ お？ 終わったのか？ 少年達」

紙を握り締めた三浦さんの周りには、三浦さんと同じ年代らしい人たちが5人集まっていた。仲間にもまれてる三浦さんを見ると、なんだか急に好青年に見えてくるから不思議だ。

「次は何を手伝えればいいっすか？」

「そうだなあ……？」

考え込んでいる三浦さんの横で、影沼をじろじろ見ていた男の人が口を開いた。

「つてか君さあ、テニス出来るんだよね？」

「え？ あ、はい」

「じゃあ、俺とペアを組もう。うん、そうしよう」

「ええ！ 俺?! ……ですか？」

ダブルス？ 影沼が？ しかも相手は5歳以上年上のベテランだぞ。合わせられるのかよ？

戸惑いながら返事をする影沼に、三浦さんたちは強引に話を進めた。

「あ、いいね。じゃあ、隆司たかしと弘幸ひろゆきでダブルスね。弘幸ひろゆき、すぐ準備できる？ 開始まで隆司たかしとアップしてこいよ。隆司たかしはフォーメーション好きだからさ、教わって来い」

「え？ え？ あ、ああ……はい」

影沼は慌てて自分のバッグを探し始めた。ラケット、持って来たのか……。

「郁巳いくみ、こつちの子もテニス出来るだろ？」

「ん？ ああ、智明は療養中でムリはさせられねえから、ダメ。

あ、おーい？ 隆司^{たかし}、そいつパワーヒッターだからヨロシクー！」

「オツケー！」

黄色いフレームのラケットを高々と上げて、隆司^{たかし}と呼ばれた人が影沼を連れてコートへと向かっていく。

あいつ、ついていけないのか？ 確実に俺たちより技術も経験も上だと思われる青年集団だぞ。勉強する前に、ぼろぼろになりそうだな。影沼の方が背がでかいのに、雰囲気にも飲まれてオロオロする縮こまったあいつの姿が想像できた。

「さて、智明には予定通り審判を頼むよ。試合開始は10時だから、それまでは休んでてくれていいぞ？」

「あ、はい」

俺は本部に設置されたパイプ椅子に適当に座った。動いていれば涼しい風も、テントの日陰でジツとしてしていると寒いだけだった。俺以外は全員試合に参加するらしく、試合の時間や審判の段取りを何度も確認しているようだった。ざわつく声が、まるで壁一枚を隔てたみたいに遠く聞こえる。それが、今の俺とテニスの距離なのか。

「はい、お茶どうぞ？ 温まるわよ？ 君、智明くんでしょ？」

声をかけてきたのは、運営席にずっと座って作業していた髪の長い女の人だった。目の前に出された湯気の立つ紙コップを手にすると、ジーンと熱が伝わってきて何故かホツとした。

「元気ないわねえ。郁巳が心配するのも分かる気がするわあ。ねえ？ 知ってる？ 笑顔は最強にして最高のラッキーチャームって言葉？」

「えっ？」

ラッキーチャーム……どっかで聞いた事のあるフレーズだった。

「あれ？ 郁巳から聞かされなかった？ 彼の口癖なのよ。笑顔は、自分と周りに幸せを運んでくれる幸運の御守なんだって。うふふ、前向きでしょ？」

その時俺は、最悪に嫌な予感がしていた。

だけど、それがなんなのかは自分でも良く分からなかった。

第10話

6-2で2回戦敗退。それが隣でブツブツ念仏みたいに何かを唱えながら素振りをする影沼の成績だった。

時間とか予算の関係で、1セットマッチのダブルストーナメント戦。

試合が短かったから反撃できなかったとかじゃなくて、俺たち高校生より数段経験値が上の青年軍団は、桁違いに上手くて話にならなかったっていうのが現実だった。それでも、パートナーの弘幸さんが影沼のノーコンぶりをフォローしまくってくれたおかげで、試合らしくはなっていたのが救いだ。

けど、足を引っ張るところか、幼児が大人に手加減して遊んでもらっている様なレベルの差がありすぎるテニスを目の当たりにしたのは、分かってはいたけど、結構な衝撃だった。

「スピードは十分だった、手首のひねりが足りなかったか……いや、コースがイマイチだったんだ。だから」

試合を振り返って反省してるつもりらしい。パワーに拘るあまりに、コントロールが不安定になるのが影沼の弱点なのだが、本人はそれを受け入れない。どうしても、剛速球が打ちたいんだそうだ。

審判を任されてはいたけど、結局は青年軍団が爽やかに引き受けてくれて、俺たちはタダの見学者になっていた。

「負けて……悔しかったか？」

「は？」

影沼はキョトンとしていた。

そうだろうな。

「そりゃ、悔しかったさつ。やっぱり、経験が違つとこんなに差があるんだよなあ。でも、俺のサーブも入ったぜ。見たる？ あれは爽快だったっ！」

やっぱりそこなのか。

影沼は、またラケットを豪快にスイングする。

本当に悔しいと思ってるんだな、影沼は。あれだけの差を見せ付けられても、本気で勝つつもりでいたんだらうな。

でも、俺ならきつと……思わない。

パートナーにミスをカバーしてもらって、サポートしてもらって、拳句に決着まで付けてもらって……何のために自分がいるのか分からなくなるだろ。その上で、勝とうなんて……そんな図々しいことと思えるわけがない。

あいつみたいに図々しい方が、テニスには向いてるのかもしれない。

そんなことを考えながら、図々しいことこの上ないルカの顔を思い出していた。

「おう、隆司っ。お疲れ様だったな」

本部のあるテント付近で休憩していた俺たちに声をかけてきたのは、試合を終えたばかりの三浦さんだった。

首にタオルをぶら下げて、まだ息が乱れたままだ。

「三浦さんっ、お疲れ様っス。3回戦終わったんスか？ ってか準決勝どうでした？ 勝ちました？」

「おうよ、もちろんさっ……って言いたいとこだけど、負けた」

「えええええっ！ マジっすかっ？ ってそれ、相手どんだけツワモノなんすか!?!」

三浦さんと手合わせをした事があるらしい影沼は、デカイ声で言う。おかげで、周りにいる人たちが振り返って爆笑している。

「はははははっ、何言っただつ。俺より強いやつなんてゴロゴロいるさ。あいつだつて……お前とペアを組んだ弘幸だつて、俺より全然上さ。インターハイにだって出場したことがあるんだぜ？」

スポーツドリンクを飲みながら、三浦さんがニタリと笑った。

「……すげー」

影沼は本気で感心しているが。

そんな高レベルな人たち相手に試合って。付いていけるわけない

だろーがっ。

「といても、まあ、過去の栄光だ。そんな俺らも、もうおっさんだしなっ！」

バンッと影沼の肩に平手を食らわせると、三浦さんは俺の隣の椅子に座った。

そして、怪我の調子はどうだ？ と聞いてきた。

どうもこうもない。俺の答えはいつも同じだ。

「まあまあ、ス」

「そうか……お前さ、テニス出来なくて、腐ってるだろう？ 隠す

なよ、別に変な事じゃない。誰でもそうなるさ」

「……」

三浦さんにケガの事を悩んでるとは、言った覚えがない。じゃあ、顔に出てたとかそういうことか？ テニスしたそうにしてたとか？

なんだかそれは、男として情けない気がする。

「別に腐ってなんかいないですよ。ただ、周りをごちゃごちゃうるさいだけで、俺は別に、何とも……」

思っていない。と言おうとしたけど、言い訳しているみたいで嫌になっ

った。本当は気にしてるくせに、それを言えないのは男だからか？ それとも、プライドが高いせいなのか？

大人の三浦さんには、全部が見透かされてるみたいで悔しかった。大きな溜息を吐いて、椅子にもたれた三浦さんは、俺の顔をちらりと見てから意を決したように口を開いた。

「俺さ……店をやめようと思うんだ」

「えっ……？」

突然のなりゆきに、俺はとまどった。何で急にそんなことを。

「でも、やめたっ！」

「は？」

三浦さんの言いたい事がなんなのか、全然分からなかった。

「俺さ、すげー大切なもん失って、それがないと生きていけないん

だって、失ってから気付いて。どうせもう取り返しが付かないなら、
いっそ全部やめちゃおうかって思ったんだ」

笑みが浮かんでるのに、声は辛そうだった。

「サーファーもやめちゃうって事ですか？」

後ろで聞いていた影沼が静かに聞いた。

「そう……でも考え直した。お前見たから」

三浦さんの視線の先にいたのは、俺だった。

「は……？」

なんで俺？ 何もしてねえし。

「お前が怪我して、好きなテニス出来なくてふてくされて、それでも店に来てラケット眺めて悶々としてるの見たら、『何腐ってんだよっ、好きなら好きでいいじゃねえかっ』って言いたくなってそしたら、それは自分も同じだなって思ったんだ。って、わりい。自分事なんだけどな」

鼻の頭をポリポリとかいて、三浦さんは続けた。

「だから、お前にも自覚させてやるうかと思つてさ。どれくらいテニスがやりたいかって事をさ。見るだけじゃもどかしくてイライラするだろ？ やりたいからイライラするんだ、できない事にな。だったらやればいい。上手い、下手なんて他人が決めたちっさい枠にハマる事ないさ。俺の場合はサーフィンだけだな」

三浦さんは照れくさそうに笑った。

それをわざわざ俺に伝える為に、テニスの試合を開催したんだろ
うか？

「まあ、俺もここいらで気分転換がしたかったしなっ、それで、仲間集めてテニスしてみたんだけど、結局は自分たちで楽しんでるだけなよなっ、はははっ。俺の大切なものは二度と取り戻せないけど、お前はまだ若いんだから、いくらでもやり直しがきく！ 少年、小さくまとまんなよっ」

「は……うわっ」

くしゃくしゃと俺の髪をかき乱していった三浦さんは、次の試合

の準備の為にコートへと向かっていった。

「三浦さんの様な人でも、出来ない事ってあるんだなあ」
影沼は、走り去る三浦さんの背中に呟いた。

第11話

宿題の論文を担任の井上に提出する為に行っていた職員室から戻ると、影沼が俺の席に座っていた。

「お！ やつと戻ってきた。一緒に帰ろうぜ」

なんだよ、急に。

「部活は、どうしたんだ？」

「今日は休みなんだ」

それで、井上がまだ職員室にいたのか。

「いいけど、なんかするの？」

影沼が俺のところに来るのは、テニス関連か買い物に付き合っただけ。ほしい時くらいだ。

「ああ、三浦さんに呼ばれたんだ」

「三浦さんに？ 何でまた？ ガットはこないだ買ったばかりだろ？」

俺は、机の上に準備しておいた鞆を脇に抱えた。すると、影沼も席を立つ。

「そうなんだけど。俺も良く分からないんだ。ただ、時間のある時に智明と一緒に店に来てくれて言われたから」

「ふーん」

なんだろう？ また何かイベントでも催すのか？

俺達は二人で並んでゲタ箱へと向かった。

まだ4時前。平日の街中はガランとしていた。

「ちわーっス」

相変わらず、影沼の声はでかい。幸いにも客がいなかったので恥

ずかしい思いはしなくて済んだ。

レジカウンターへ向かうと、三浦さんではなく若い男のスタッフが立っていた。

「三浦さん、いねえな。今日来るって言ってあったのか？」

「いや。いつでもいいって言ってたから……」

影沼が首を横に振る。

アポなしかよ。

そんな俺達の会話が届いていたのか、カウンターにいたスタッフが奥を覗いて声を張り上げた。

「オーナー！ お客さん来てますよー」

呼ばれて慌てたのか、店の奥から出てきた三浦さんは、商品の入っていたらしい小箱を抱えていた。

「おお。お前らか。呼びつけて悪かったな。えっと、どうするか？ まだ整理できてないんだよな」

店の仕事が忙しかったのかも知れない。

三浦さんはキョロキョロしながら、どうしようか迷っている様子だ。

「あの、忙しいなら俺達出直しますけど？」

「いや、そうじゃないんだ。じゃあ、とりあえずこっちへ」

そういうと、小箱を抱えた三浦さんは俺達をスタッフルームへと案内した。

そこには、三浦さんくらいの背丈のロッカーと、簡素なパイプ机が置いてあり、隅に追いやるようにダンボールが積み重なっていた。「えっと……話って何でしょうか？」

見た目とは裏腹に小心者の影沼は、いつもとは違う三浦さんの対応に耐えられなくなったのだろう。

動揺気味だ。

「ああ、まずは座れ。えっと、この間は交流試合の手伝いをありがとう。おかげで順調に終わらせる事ができたよ。助かった」

三浦さんの表情はいつもと同じ爽やかな笑顔なのに、どこか落ち

着かない印象を受けた。

「いえ、こちらこそ楽しかったっす。またいつでも呼んで下さい」
なんだそんなことか、とホッとしたように影沼が言った。

「それで、今日は、わざわざ来てもらって悪かったな。まあ、あれだ。話つてのは、俺の個人的なことなんだが……」

歯切れが悪かった。こんな三浦さんは始めてみた。

「何かあったんですか？」

思わず問い返した。

「うーん、嫌、あつたつていうか、別にないつていうか……それは、いいとして。実は……店をやめる事にしたんだ」

は？

「ええええええっ！！！」

呆然とする俺の横で、影沼が叫ぶ。

一瞬、何事かとスタッフが覗きに来た。

「と言っても店はなくならないんだけどな。俺は完全に畳むつもりでいたんだけど、仲間達が協力してくれる事になって。お前達みたいなヒョっ子少年もいる事だし、店だけは残すことにしたんだ」

「何で？ どうしてっすか！？」

意外にも影沼が食い下がる。

「まあ、俺にも一応色々あってさ。実は、アメリカへ行くんだ。いつ帰ってくるかは決めてない。向こうでプロサーファーのタイトルを取るつもりなんだ」

そういう三浦さんの目は、しっかりと上を向いていた。迷っている様子は微塵もなかった。

アメリカなんて、スケールがでかすぎる。そんな簡単にタイトルなんて取れるもんなんだろうか。

俺には分からないが。

「そう……なんすか……なんか、すごいっすね！」

「ははっ、すごくはないさ。そんな簡単に世界に通用するわけもないしな。でも一人で悶々としても何も始まらないから」

なんか、俺のことを言われてるみたいだった。

「いつ出発するんすか？」

「なるべく早くだな。なんだかんだ理由つけてずっとウジウジしてたからなあ。やってもらえないのに出来ないって決め付けて……そして迷ってる時に不幸が降って湧いて。そのまま、それに縋り付いて自分を正当化しちまったんだ。俺にはこんな不幸があるから出来ないんだ、ってな」

三浦さんの瞳は、俺の目をジッと見つめていた。

ああ、きつとコレは俺の事だ。

三浦さんには、俺みたいなヒヨツ子の事はお見通しだったんだ。

「だから、とりあえず、アメリカへ行く。んで、ボロボロになるまで、メッタ打ちに打ちのめされてくるさ。それでも、根性で這い蹲つくばって足掻あがいて。そしたら、胸張って帰ってくるからさ」

三浦さんは、とても気持ち良さそうに笑っていた。

「寂しくなるっすね……」

影沼がいうと、三浦さんは俺と影沼の頭をぐしゃぐしゃと掻き乱した。

「んで、本題はこつちだ。俺が使ってたラケットとかお前達にやるうと思つてさ。持つてくか？」

そういうと、三浦さんはダンボールの中から、無造作に詰め込んであったらしい使い込んだラケットや、まだ未使用のテニスボールなんかを取り出した。靴まであるが、サイズが合わない。

「いいんすか！？　ありがとうございますっ！　お、このダンプもらい……ん？　何だこれ？」

楽しそうに物色している影沼が、ふと怪訝けげんそうに何かを拾い上げた。

その手に納まっていた物は　指輪だ。

しかも、俺はその指輪に見覚えがあった。

「ん？　ああ、こんなところにあつたのか。悪い、それは俺んだ」
影沼から受け取ると、三浦さんはその指輪をネックレスのチェー

ンに通して、首にかけた。

「カッコいいっスね。竜？ ですか？」

「いや、海の波をイメージして作ってもらったんだ。俺にとっては……絆みたいなもんな」

「へっ」

良く理解出来ていなそうな影沼の前で、三浦さんは照れくさそうにはにかんだ。

そして、その首に掛かっていたのは、紛れもなくルカがしていたのと同じ指輪だった。

「……それって、オーダーなんですか？」

聞かずにはいられなかった。

ルカと同じ指輪。お揃いで持つなんて、理由は一つくらいしか思い浮かばない。

「ああ、オーダーした1点ものだ。ペアだから、物は2つだけどな雷に打たれたような衝撃を受けた。

じゃあ、ルカは……」。

「へえっ、ペアなんスね。ってことは、彼女いるんスね三浦さん」

からかう様に影沼が言くと、三浦さんは酷く辛そうな顔をした。

「いや……もう、いないんだ」

それは、かろうじて絞り出した様な声だった。

第12話

ルカが、三浦さんの彼女……いや、「もういない」と言っていたから、元彼女か。もしかしたら、兄妹とか従妹とかかもしれない。大学時代の後輩って線もありえるか。

っていうか、やっぱり人間だったのか？

あまり意味のない一人問答を、俺は朝からずっと続けていた。

つい最近まで俺の部屋に入り浸っていた自称天使のルカは、三浦さんと同じ指輪をいつでも身に付けていた、妙に明るい女だった。ラケットを振るのに邪魔だから外せと言った時も、指輪だけは断固として外さなかった。

それほど、大事な物だったということなんだろう。

俺は、帰宅途中にあるコンビニにふらりと立ち寄った。何故か、異様に喉が渴いていた。

よく冷えたスポーツドリンクを手に、店を出る。冷たい感触が喉を通ると、少し冷静になれた気がした。

そして、再び思案する。

三浦さんがアメリカに行くのに、ルカは一緒に行きたがるだろうか。今でも好きなら当然ついていくだろう。人間だったらの話だが、あれから、ルカには会っていない。もう、俺に会う必要がなくなつたからか。それとも、三浦さんと寄りを戻したから……。結局、ルカが何の為に俺に会いに来たのかも、分からないままだった。

今更、どうでもいいことかもしれねえけど。

うだうだ考えていたせいか、俺が家に着いた時には夕日は沈みかけていた。家では既に母さんが夕食の準備をしていて、リビングで妹がテレビにかじり付いていた。

「智くん、おかえりなさい。夕食が出来たら下りてきてね」

俺がそのまま2階へ上がろうとすると、キッチンから母さんが声をかけてきた。適当に返事をして部屋へ入る。

「あ！ おかえりなさい、智明」

「……なっ!？」

ルカ!!!」

視線の先にいる、自称天使を見たまま俺は固まった。

満面の笑みだった。相変わらず、俺のベッドの上で胡坐をかき、クッションを抱えている。ジャージ姿だった服装は、最初に出会った頃のロックテイストなジーンズ姿に戻っていた。

背中には、殆んど黒くなった翼が生えていた。

俺は、無意識にルカの指先を見る。クッションに隠れていて、指輪をしていることは確認できない。

「……お前、こんなところで何して……」

息が詰まる。

「やつほ。元気してた？ えっと、ちよつと野暮用で？」

ルカは軽い口調で話しながら、片手を軽く挙げた。

お前は、三浦さんの彼女なのか

聞けるはずもない。

ほんの数秒だけ、俺とルカは黙ったまま見つめ合っていた。

先に口を開いたのは、ルカだった。

「智明さあ、テニス好きだよ。今の生活楽しい？」

ルカの顔は真剣だった。

「なんだよ、それ」

突然、そんな事聞かれても。意味分からねえよ。

「あはは、すつごい困った顔してる。智明」

「なっ……からかってんじゃないよ」

俺は、やつと体の緊張が解けて、鞆を机の上に置いた。

「ごめん、ごめん。智明の幸せって何かなあって。テニスかな？」

「やっぱり」

テニスは好きだけど、幸せと直接繋がってるとは思わない。

「そういうお前は、どうなんだよ？」

「やっぱり、三浦さんといたんだろうか。」

「あたし？ あたしは……………」
暫く俯いてからルカは言った。

「大切な人達が笑ってくれれば、それで幸せかなあ？ えへへ、らしくないよね？」

恥ずかしさを誤魔化すように笑う。

窓から差し込む朱色の夕日が、ルカの顔に影を落としても悲しげにみえた。

すると、突然、水晶のような小さな粒が瞳から溢れ出てきた。

「あれ？ やだ、なんだよ、これ…………えへへ、何だろ。や、やだなあ、違うよ、ちがつ……………」

涙を拭いながら、必死に笑顔を保とうとするルカの姿は、とても綺麗で切なかった。

ドクンっ！

心臓が大きく跳ねる。

急に、いとおしくてたまらなくなった。

触れてみたくなった。

俺は、ルカに近づいた。

一歩足を踏み出す事に、何かが俺の心臓を強打する。宙に浮いたような感覚と、胸をぎゅっと潰されたような息苦しさ。

「大丈夫、大丈夫だよ。ごめん、びっくりするよね。何だろね、ホント……………智明？」

涙を拭う手には、指輪が嵌められていなかった。

俺は、ルカの顔を見下ろす。その瞳はいまにも溢れ出しそうな宝石でいっぱいだった。

「えっと、ちよっ……………」

頬に手を伸ばす。ルカが身を引いた。

けど、俺の体は止まらなかった。

心臓の音しか聞こえない。

ルカの瞳だけしか、見えていなかった。

俺はルカの唇へと、自分のそれを重ねた。

ほんの一瞬、柔らかな感触を感じた。

けど、それは本当に僅かな時間だった。

「……っつにしてみたっ、てめえ!!!!」

怒号と共に、俺は床に吹き飛ばされる。

気付いた時には、顔を真っ赤にして仁王立ちするルカの姿があった。

俺……ルカに……

しだいに、自分のした事の重大さが脳内に染み渡る。しくしくと込み上げる焦りは、未だかつて無いほどの危機感と罪悪感を俺に与えていた。

「わ、わりい……」

俺の言葉を聞いたルカの頬を、再び雫が伝って落ちた。

唇を噛み締めたルカは、そのまま姿を消してしまった。

取り残された俺は、現実に戻される。

左の頬がづきづきと痛み始めた。

そこで、やっと俺は殴られたことに気が付いた。

しかし、その痛みよりもルカを傷つけてしまった事の方が重かった。

もう二度と、会うことはできないかもしれない。

ルカは、俺の前には現れないかもしれない。

何であんなことしたんだ。なんで、急に

「……くっそ……」

俺は頭を抱え込んだ。

第13話

キスをした……って言えるだろうか。

相手の同意もなく、俺の勝手に成した行為。押し倒したつもりはないが、少なくともル力を泣かせたのは、俺だ。

涙をこぼしながら消えたル力は、悲しいとかじゃなく、酷く怒っていた。未だに痛む頬が、それを物語っていて、俺は後悔の念にとっぷりとりつかれていた。

「んだよ。だから……って、おい。白上？ 聞ってる？ 俺の話」

「あ？ ああ、わりい」

「どうした？ 大丈夫か？ 調子悪いなら保健室行ってみれば？」

「いや……そういうんじゃないから……」

心配そうに顔を覗くようにする棚橋は、俺の前の席に、後ろ向きで座っていた。

「ムリすんなよ？ んで、さっきの話だけど、どう？」

「話？ ……ってなんだっけ？」

まったく聞いていなかった。

「だから、体育祭での応援団長の話だよ。俺が今んとこ団長だけ、やる気があるなら団長2人体制、つてのでどうかって話」

「ああ、団長ね……」

棚橋は、俺を応援団長に仕立て上げようと熱心だった。応援や最後のフォークダンス以外に参加種目のない俺を、どうにかして団長へ引っ張りあげたい腹積もりらしいが、俺にその気はない。

何度も断っているが、爽やかさとは裏腹に、意外と執念深い性質らしい。

「練習は、せめて1回は参加してもらわないと困るけど、お前なら1回で十分だよな。後は、俺が適当に打ち合わせしとくし」

「いや、だからさ。団長は勘弁してくれよ。そういうの、性に合わ

ないんだよ」

似たような台詞を何度も言ってる気がするの、気のせいじゃない。それに、今の俺はそんな気分じゃない。

「スカツとするよ、大声で叫べばさ。結構、楽しいんだけどなあ。ま、気が変わったら声かけてくれよな。絶対だぞ！」

力強く何度もを念押しすると、棚橋は自分の席に戻った。何度言われても、答えは否だ。

もう直ぐ昼休みが終わる。放課後になれば、また帰宅部のように颯爽と帰路に着く。

「……リハビリ、あったな」

そういえば、と思いついて呟いた。

事故にあってから、2ヶ月が経とうとしていた。

「ん……そろそろ、走ってもいいかなあ」

「えっ？」

すました顔で足のレントゲン写真を見ていた先生が言った。

「そうだなあ……どうするかあ」

曖昧な言い方にイラツとする。

「まだ、ダメですか？」

走りたい。テニスがしたい。だから、YESといてくれ。

「……うん、いいだろう」

「本当ですか!？」

思わず身を乗り出した。傍にいた看護師さんが、くすくす笑いだした。

「ただし、リハビリにはもう暫く通うこと。当然だけど無理はしない事。それから、少しでも違和感を感じたら、すぐに診察に来なさい」

「はい!」

リハビリでも何でも通うくらい大したことはない。やっと、思う存分走れるぜ。

よし、と言つて診断書をファイルに閉じると、おつかいをこなした子供を見るような目で、先生は俺に笑いかけた。

「智明くん、じゃあ、こつちへ」

廊下から手招きしていた秋山先生に従つて、俺はリハビリルームへと移動した。なんだか、急に足が軽くなったようだ。

最初は、必ず電気治療からだ。

「良かったね、智明くん。走れるようになって。すごい頑張つてたもんな」

流す電気の量を調節しながら、秋山先生は自分の事のように喜ぶ。年上とは思えない程くつたくのない笑顔を向けられたが、上手い言葉は出てこないの、とりあえず頷いた。

「だけど、本当に早かつたよ。事故の時のレントゲンも見せてもらったけど、完治は不可能だつて思ったからね」

そんなに、俺の状態は悪かったのか。確かに、意識が回復したの、だつて奇跡だつて言われてたなあ。

「どんな事故だつたんだろう？ 当時の事を思い出そうとすると、俺の記憶は曖昧だつた。」

母さんと妹の美郷と俺。有休の取れなかつた親父を残して、家族でバスツアーに参加した。乗り物酔いの激しい美郷のために、運転席に近い座席を陣取つて、俺は……寝ていたな。

母さんの強引な進行で参加させられたから、ずっと窓際の席で寝ていたんだ。だから、覚えてないんだ。

俺の記憶にあるのは……

ものすごい衝撃音と振動、それに俺を起す母さんの声。

それから

『危ないっ！ 母さんっ！』

誰かの叫び声。

女？

目の前には、誰かを庇おうとする女の姿。
白いTシャツに、古着みたいなジーンズ。

次の瞬間、短い真つ黒な髪が一瞬にして近づいたかと思うと、俺の手が、女と女が庇っていた人を突き飛ばした。
ルカ？

「え？ 何？ 智明くん」

気付けば、キョトンとした顔の秋山先生が覗き込んでいた。

「あ、いえ、何でも……ないです」

「そう？」

先生は、電気コードを片付けていた。

俺は、手の平で顔を覆って俯いた。

なんだよ、今の？ 事故の記憶？

誰かを必死に庇おうとしていた女の姿は、ルカに似ていた。

まさか、そんな事あるわけねえ。

それに記憶は曖昧だし、あいつは天使のはずだろ？

再び記憶を掘り起こそうとしても、映像は、どんどん薄くぼやけていくばかりだった。

分からない。どういう事だ？

その日、リハビリを終えた俺は、事故にあつたバス旅行の参加者名簿がないか、駄目もとで母さんに尋ねてみた。

あるわよ、と不思議そうな母さんに渡された紙切れには、ルカと読める名前が1人だけ記載されていた。

月見里瑠夏 ヤマナシルカ。

俺の知ってるルカと同一人物だろうか？

名前をなぞりながら思い出したルカは、透明な宝石をこぼしながら俺の前に仁王立ちしている姿だった。

第14話

午前5時30分。目覚ましが鳴った。
腕だけを伸ばして、スイッチを切る。
かなり眠い。

早朝ジョギングをしようと思って設定しておいた目覚ましに、少しだけイラついた。昨日の夜は、ルカの事を考えていて、なかなか寝付けなかった。

当然、寝不足だ。

しかも、散々考えたけど、結論的には不明。
自称天使であること。

背中に翼が生えていること。
女であること。

それから、時々消えたりすること。
後は、ルカという名前だけ。

最後に会った時には、幸せか？ と突然聞かれて。何が言いたかったのかは分からなかった。

重たい瞼をこじ開けて、俺はベッドから降りた。

ジョギング用のジャージが床の上に置いてある。せっかく走る許可をもらったが、袖を通す気分じゃない。

ベッドの脇には、母さんに見せてもらった紙切れが1枚。バス旅行の名簿だ。参加者の名前だけが印刷されていて、当たり前だが、詳しい住所や電話番号は載っていない。

月見里瑠夏^{ちまなしろのか}。

これだけじゃ、何も分からない。旅行社に問い合わせたって、どうせ個人情報とか理由つけられて、教えてはもらえないに決まっている。

結局、行き詰まりだ。

三浦さんはアメリカに行っちゃったし。いたって聞けるわけねえ

けど。元カノは、月見里瑠夏やまなしろのかって名前ですか？なんて。

そもそも、そんな事聞いてどうするつもりなんだ。

「何やってんだ……俺……」

急に全てがどうでも良くなつて、俺はベッドに体を投げ出した。ルカが誰かなんて知る必要ない。あいつは、天使なんだ。そう、言つてたたる。翼だつて生えてる。だから人間じゃない。

じゃあ、俺は、天使にキスをしたのか？

いや、そうじゃない。そういう事じゃねえ！

あいつが、何の為に俺の前に現れたのか。俺はそれが知りたい。守護天使だと名乗つてまで。もっともらしく翼まで取り付けて。

天使なんて、空想の存在でしか有りえねえのに。

どうして、人間のままで俺に会いに来ない？

まさか、本当に天使でもあるまいし。

けど……。

夕日に照らされて、透明な涙を零したあの時のルカは、天使だと信じたくなるほど澄んだ瞳をしていた。

女の涙は苦手なはずなのに。

ドクンッ

まただ。心臓が締め付けられる。

ルカが泣いたのは、俺のせいだから？俺があいつを泣かせたか

ら？

「……くっそっ！」

俺は、ルカの泣き顔を掻き消すように、ギョッと瞼を閉じた。

「やっべえ！遅刻じゃねえかよっ！！」

銀フレームの壁掛け時計を見上げて、俺は叫んだ。一瞬目を疑つたが、確かに針は、7時50分辺りを進行していた。

急いで制服に着替えた俺は、ボタンを留めるのももどかしく、鞆とネクタイを引っ掴んで部屋を飛び出す。

せつかく早起きしたのに、結局2度寝しちまったらしい。

目が覚めた時には、カーテンの隙間から明かりが差し込んでいて、時間が経過していた事を告げていた。

転びそうになるのを何とか堪えて、階段を駆け下りる。

「智くん？ 今日遅いのね？ 朝食出来てるわよ？」

「いらねえ！」

朝食を取ってる時間なんか、あるわけない。

「ええ！ もう行くの？ あ、待って。智くん。今度の日曜日、予定を空けたい欲しいの？」

「あ〜？」

靴を履きながら聞き返す。

「日曜日。足が治ったみたいだから、お出かけしたいのよ」

「買い物なら美郷と行って来いよ。俺はパス」

「違うのよ。美郷ちゃんも行くけど あ、智くん！」

ゆっくり話を聞いている暇はない！

俺は、呼び止める母さんの声を無視して玄関を出た。

走ろうとして、立ち止まる。

そういえば、もう、バスで通学しなくてもいいんだった。

俺は、再び玄関に戻って小さな鈴の付いた鍵を引っ掴んだ。駐車

場の奥にある銀色の自転車に、それを差し込む。

「ギリギリだな」

気合いを入れてハンドルの握ると、今の俺に出来得る限りの力でペダルをこぎ始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7399k/>

翼 - TSUBASA -

2010年10月13日17時43分発行